

松田道雄の育児思想について (V)

——伝統的育児法に学ぶ父親の役割——

大 森 隆 子

序

前稿¹⁾において、筆者は松田道雄著『育児の百科』の内容を伝統的育児法の扱いに焦点を当てて検討した。これは、松田の育児思想の根幹の一つを成す‘日本の風土にふさわしい育児、民族の風習としての育児’という主張が、育児書の記述全体を通して、具体的にどのように、またどの程度扱われているかを分析したものである。その結果、取り上げられている伝統的育児の事例は10件であった。氏が重視しているわりには軽微な扱いといえる。しかしながら松田の育児書のスタート（『赤ん坊の科学』1949年）にもどり、順次検証したところ、そもそも零からの出発であったこと、2冊目の『育児日記』（1957年）に初めて登場（5件）したことなどが明らかになった。数的・量的側面からは見えにくい松田の伝統的育児法に寄せる変化の軌跡と深意について、今回は、父親の子育てへの関わりに視点を当てて著した『おやじ対こども』²⁾を取り上げて考察する。

この書が出された1966年の数年前、1960年に松田は4冊の育児書（『新版赤ん

坊の科学』『はじめての子供』『私は赤ちゃん』『私は二歳』）を立て続けに出版している。それらはいずれも、この『おやじ対こども』のテーマに連なる育児における父親の関わりに触れてある。それ以前の育児書2点（『赤ん坊の科学』『育児日記』）には扱われていないことを鑑みると、1960年前後は松田の育児思想上のターニングポイント年とも考えられよう。本稿では、初めにこれら4冊の育児書を検討し、父親に求める役割についての内容を整理したい(I)。次に、『おやじ対こども』について検討を行う(II)。その上で、松田が着目した江戸時代の町民の子育て論に表われる父親の役割を集約し(III)、それら全体を踏まえて導き出される松田の育児思想について考察を進めたい。

I 育児における父親の役割に関する視座の検討

1 『新版赤ん坊の科学』

第二次世界大戦終了後間もない1949年に出版された、氏の最初の育児書である『赤ん坊の科学』³⁾では、育児の主体はもっぱら母親と小児科医師を対象としていて、

1) 「松田道雄の育児思想について (IV)」(『豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第20号』所収)

2) 松田道雄著『おやじ対こども』岩波書店、1966年。

3) 松田道雄著『赤ん坊の科学』創元社、1949年。

父親については埒外である。10年余を経て改定された新版⁴⁾で、初めて父親の役割について触れている。それは、妊娠期の母体を姑から守る妻へのいたわりに始まり、育児期の「離乳」と「チエ熱」の箇所には氏の主張が述べられている。「離乳」では、「赤ちゃんは安心感を求めて乳房をさがすのです。その場合赤ちゃんが母の愛撫だけしか知らないと、乳房以外では泣きやみません。—中略—父おやが赤ちゃんに愛情のあたたかさを教えている家庭では、赤ちゃんはそれほど母おやの乳房を求めません」⁵⁾と言い、「チエ熱」では、「両親が家庭のなかでどれだけ自主性をもっているかというテストにもなります。おばあさんと同居していて、おばあさんの心配に押されて医者をつらねたり、大丈夫ですという医者を、たって深夜に呼びだしたりする父おやというものがあつたとすると、その父おやは家庭のなかで指導権をにぎっていないということがバクロされたわけです」⁶⁾と言っている。ここでは、父親の存在を、愛情を通して赤ちゃんに刻印することと、育児の主導権を握ることの2点を指摘している。どちらも育児行為に対して、父親が自立的な存在感を示すことの大切さに重点を置いているように思われる。

2 『はじめての子供』

この書⁷⁾は、育児が父親と母親の共同作業であることを世に訴えるために書かれた感がある。その証拠に、松田はあとがきで次のように語っている。

はじめて子供をもった親は一度は、こういう記録をつけようという気になるものだが、これを実行する家庭はごくまれである。それは父親の協力がつかないからである。育児というものが母親の仕事だと考えられているためである。

子供がうまく育っていくためには、父親はどういう家庭環境を作らねばならぬかということが、あまりにも知られずにいる。この記録は育児における父親の役割を見事に示している。⁸⁾

こうした基本的な主義主張のもとに、具体的な父親の育児行動として例示している事項を以下に引いてみると、まずその一は、夫と妻が精神的に一つになって、調和した環境をつくるということである。姑に支配権があつたり、夫が暴君であつてはいけないという。その二は、診療所にはでき得る限り両親共に行くということ。病気で不安な時に、心細い体験や医師の助言を分かち合うということである。その三は、赤ん坊が母親と同じ位、父親にも甘えることができるようにするということである。そのためには、父親は自分の都合で愛玩するのではなく、乳房が与える愛撫とも異なる理性的な愛情を教えることが肝要であるとする。その四は、赤ん坊と一緒に遊ぶことを十分楽しむことである。そのことこそが子どもの信頼を勝ち取る何よりの手段であるという。その五は、父親の働いているところを見せることである。緊張感をもって仕事をしている姿に父親の権威を感じるのだという。

4) 松田道雄著『新版赤ん坊の科学』創元社、1960年。

5) 同上、p136。

6) 同上、p167。

7) 松田道雄著『はじめての子供』中央公論社、1960年。

8) 同上、pp195～196。

本書は、松田が育児行為は両親が協力して負荷すべきと言う考えを明確に打ち出した最初の一冊といえよう。特に、両者間の協調性と共に父親の権威を子どもに感知させることを通告していることに着目したい。

3 『私は赤ちゃん』

この著書⁹⁾は、この頃の典型的な家族形態、すなわち団地住まいの核家族に誕生した第一子を主人公にして、赤ちゃんの立場からあるべき育児の姿を追求したユニークな育児書である。全篇、当世の育児通念に対して問い直しをしている挑戦的な本でもある。その一つとして、父親に対しても新しい提起をしている。一例として本文の「パパ——私とあそんで——」から引用してみると、

パパがもっと元気一ぱいで帰ってきて、私を抱いて散歩にでかけてくれたり、お湯に入れてあそんでくれたりするといい、ママの手だすけになるというような消極的な意味から、それがいいというのではない。私はママだけの子ではない。パパの子でもあるのだ。だから私はパパにも、だっこしてもらったりあそんだりしてほしいのだ¹⁰⁾

とある。ここでは、子どもからみて、父と母は育児の担い手・愛情の注ぎ手として対等に捉えられている。この視点は全体を通して貫徹されており、退院の日、「パパも会社を休んで迎えに来た」¹¹⁾を始めとし

て、休日は公園等に遊びに連れて行くに類する物理的協力姿勢が随所に書き込まれている。また、母親の相談相手となることを通して精神的サポート役を、時には「お乳を濃くしても夜泣きしたので、もうパパはきかなかつた。育児書に何と書いてあろうが、夜に乳をのましてくれなければ、パパの身体がもたないといつてがんばり、その夜は自分でおきて私をママの胸につけてくれた」¹²⁾ というように、育児場面での主導権を発揮することも明記している。

4 『私は二歳』

この書¹³⁾は前作『私は赤ちゃん』の続編と言えるもので、前作と同様のスタンスで書かれている。しかし対象年齢が若干上がったこともあり、話題は医学的知識を伴う病気等の対応から、しつけや教育問題が中心となっている。そのため医者を外して両親で対応するケースを増加させている。興味深いのは、父母間で論争をさせ、その結果どちらの意見が通ったかを明確に提示していることである。筆者の集計¹⁴⁾によれば、しつけや教育問題が中心となる第1部では、母親の意見が通ったケースが4例、父親が5例、医者が4例、その他が1例である。第2部は、嫁姑の対立の話題が中心となっており、父親に解決策の主導権を渡している。1部2部共に父親の方に主導権を持たせていることに着目したい。

9) 松田道雄著『私は赤ちゃん』岩波書店、1960年。

10) 同上、p13。

11) 同上、p6。

12) 同上、p37。

13) 松田道雄著『私は二歳』岩波書店、1960年。

14) 「松田道雄の育児思想について（II）一子どもの立場からの育児学一」（『豊橋創造大学短期大学部紀要第18号』所収）。

II 『おやじ対こども』について

1 著書の背景

この著は、『私は赤ちゃん』『私は二歳』に引き続き、大阪の朝日新聞に連載した記事をもとに出版したものである。同社会学芸部の西村氏の発案による一連の育児記事のスタンス、すなわち「赤ちゃんの立場から親たちに注文するようなもの」¹⁵⁾を踏まえた三作目といえる。しかしタイトルが明かすように、この著は前二作とは育児観の示し方に違いがある。誕生から成育順に、子育てに関するアドバイスを具体的かつ現実的事項として提供していきつつ、氏の育児理念を表明していくという方法を踏襲したものではなく、育児観に関わる基本的な問題を正面から取り上げ、氏の見解を明確に述べて、世の父母の育児観形成に直接的に資する書物となっている。書名からも想像されるように、とりわけ育児における父親の役割を問うているものである。

この当時は戦後の新憲法の下、法的側面での男女平等社会が実現し、ある程度若い世代を中心に対等関係が定着しつつあった。父親の育児参加も、進んでいるように見えた。しかしながら松田は、父親の関わり方に強い危惧を抱くようになる。それは、父親が主体性を喪失して母親の言いなりになった形での参加実態を目の当たりにしていたからである。父親の存在感が希薄になり、父性の権威が葬られつつあることを、診察室を通して誰よりも強く実感していた。果たしてこれでいいのだろうかとの思いから、育児における父親の役目につい

て自身と世に問いかけを開始するのである。ここでは医師松田とは別の歴史学者・社会思想家としての松田の本領が発揮されている。すなわち育児と父親の関係を歴史的並びに社会思想的視野から考察して論拠を提示し、世の人々を啓蒙しているのである。

2 本書の構成と「おやじ」という用語

本書は206頁68篇（最終篇はまとめ）から成り、内容は大きく3部に分けられる。第1部は父親の現状についてとその原因究明を論じたもの（1篇～9篇）で、父親の無力化・軟弱化傾向を具体的姿から示し、その原因について新憲法の制定、家制度の崩壊、教育勅語の廃止と歴史的にまた社会思想的に究明し、最後には福沢諭吉の思想検証に至る。第2部は江戸時代の子育て書の紹介（10篇～17篇）で、京の町民である脇坂義堂の著した『撫育草』を中心に、当時の町民の父親がどのような態度で子育てに臨んでいたかを紹介している。第3部は現代の子育て問題（零歳～20歳前後まで）の具体例と父親の対応法・役割について述べたもの（18篇～67篇）で、ひとりっ子から色盲の子ども、受験地獄、学生運動、子どもの結婚と年齢幅も話題も多岐にわたっている。

書名に使用している「おやじ」という語については特に説明していないが、目次の見出しを調べると、これに相当する言葉として、他に2つある。「父親」と「パパ」である。数的には「おやじ」が5、「父親」と「パパ」が2ずつである。「おやじ」の場合は、「地震・雷・火事・おやじ」「ほれ

15) 前掲『私は赤ちゃん』p188.

られるおやじに」「おやじ泣かせの病気」「ガミガミおやじ」「先生とおやじ」というように用いられており、「父親」の場合は、「父親の軟弱化」「町家の父親」というように、「パパ」は「無力なパパ」「子ぼんのう型パパ」となっている。

3 父親の現状とその原因

松田が当時の父親達をどのように認識していたかは、この書の最初の二つの項目名によく表れている。すなわち、「無力なパパ」「父親の軟弱化」である。その根拠を本文において次のように述べている。

有為天変は世のならいと申しますが、さいきんの父親の株ほど下落のいちじるしいものはないでしょう。

私は三十年以上も小児科の医者をやっていますので、診察室というせまい舞台を介してではありますが、父親の価値の暴落していくさまを、この目でとくとみました。

—中略—

「ちょっと、おむつ出して」

父親は、いそいでビニールの袋の口をゆるめて中からおむつを出してわたします。

—中略—

父親には父親としてのある種の威厳がなくてはならぬのではないか、という気持ちが私にはあるのです。¹⁶⁾

と紹介した上で、立場上その後の子どもの姿をみるにつけ、「自家中毒」「小児ぜんそく」などは、父親があますぎる家庭で起こるとの確信に至るといふ。物理的場面では積極的に関わりを持ち出した父親の、精神的面での脆弱化について憂慮している。

その原因について、松田は次の5点を挙

げている。第一は、新憲法制定による男女平等の意識と平和主義の思想である。母親の地位が向上し、相対的に父親の地位が下落したことで、相争うことを避ける気風の定着化である。その二は、家の機能の軽量化である。それまで担っていた多様な機能が、時代の流れの中で公的負担化や外注化されたことによる。そのため、家の機能の管理責任者として重い役割を負っていた父親はその任から解放され、その結果家の中での権威を消失した。その三は、親子関係を第一に考える日本の庶民の伝統を、明治政府が忠君愛国第一主義に転換させていたことである。戦争が終結し、その思想が葬られた時、わが国の親子関係は零からのスタートを切らざるを得なかった。その四は、家庭道徳の不在である。明治維新以来、近代国家として歩み始めたわが国であるが、各自各々の家の流儀に合った近代的ルールによる家庭の規範・道徳作りを成していなかった。すべて国家が定める公德に肅々と従っていた。そのため、その公德が否定され滅失されると、私徳の抛り所がなくなってしまった。その五は、市民としての行き方が確立していなかったことである。市民というのは自立的な生き方ができることで、近代人とは、まさに市民であらねばならないはずだが、日本人はその努力を怠り、差配者が去ると漂い始めたという。その代表者が父親であるというのである。

4 現代子育て問題と父親の役割

松田が現代の子育て問題の中で、特に父親の役割に着眼している話題は、本文中の

16) 前掲『おやじ対こども』pp2~3.

項目18から67までの50項目にわたっている。それらを論点別に集約して紹介したい。その一は、「欠陥児」「完全人間という幻想」「色盲」に代表される科学や医学の力では解決し得ない障害を持って誕生したわが子への対応である。松田は、

育児についておやじの力がもっとも必要な場合とえば、生まれた子どもに欠陥のあるときでしょう。身体障害の子どもを、生あるかぎり扶養しなければならぬということで、おやじの経済的な負担は容易ではありません。

けれども、欠陥があるとわかった子どもをそだてる第一歩において、おやじは母親を力のかぎりささえなければなりません。¹⁷⁾

と述べ、何よりこうした苦難に直面した場合を第一に掲げている。

その二は、「すれちがい」「チームワーク」「禁欲のすすめ」に代表される子育てにおける協力体制の確立とその要役としての存在である。園や学校の先生達と父母、祖父母と父母などが互いによきチームワークを形成して育児や教育にあたるのが肝要であるが、その際要役には父親がふさわしいという。そのためには、

母親もまた別の意味で禁欲が必要です。なにしろ社会の情勢は日一日、おやじの威厳をひくめるほうにむかっています。この時代に教育者集団の統一をたもつためには、おやじの威厳の暴落をふせぐために子どものまえで、おやじの人物批評を客観的にやることを禁欲せねばなりません。¹⁸⁾

と述べ、他に敬語遣いや風采等のカバーリングも必要だと付言している。

その三は、「地震・雷・火事・おやじ」「ほれられるおやじに」「志をもつ」「反抗期」「世代の断層」「ガミガミおやじ」に代表される権威ある父親像の形成である。以前は、家業の伝承を通してその実力を感じ取らせたのだが、現代では通じない。松田は、現代にあつては次のような方法を提案をしている。

現在であれば、おやじが市民としての誇りを持ち、勤労を愛する誠実を子どもに感じとらせるというのが、おやじの実力のいちばんいい見せ方です。惜しむらくは、子どもに、おやじのほんとうの実力がわかるのは、子どもがおとなになって、自分の腕で食っていかねばならぬようになってからです。¹⁹⁾

庶民であるおやじとしては、庶民として生きることには徹するよりほかに道はないでしょう。めいめいのもつ能力を十分にのばすことで、他人にも自分にも役に立つように生きることです。それには、あれはいけない、これはならぬと権力から命令されるのではこまります。また、人間性をおしつぶす巨大な機構のなかにうずもれてしまわないで、日常の生活にたえず新鮮なものをもとめていくことが大事だと思います。²⁰⁾

このように父親自身が、無気力でない生き方を実践し、上からの権力に押し潰されない自立性を保つことが、子どもに対して権威を感じさせる道なのだと説いている。

また日進月歩の時代性を捉える視点からは、子どもと共に学びつつ、尚且つ優位性

17) 前掲『おやじ対こども』p109.

18) 同上, p59.

19) 同上, p71.

20) 同上, p78.

を保持することが大切と説いている。

今日のようにめまぐるしく世の中がかわって行く時代では、おやじも子どもも、あたらしい文明開化に同時に適応していかねばなりません。

子どもは適応力においてめぐまれ、おやじは判断力においてすぐれています。それぞれの得意な道具によって、世代の格闘がおこなわれます。この格闘で子どもを組み伏せるのが教育です。²¹⁾

無気力でない生き方というのは目的や志を持った生き方であって、これは母親にも適用されるものである。それについては、「共かせぎと共ばたらき」の項で、金銭のためだけに働くのは共かせぎで、志を持って働くのは共働きと使い分けした上で、「そういう志をもっていますから夫婦は身をもって同権を実行します。おやじだって、おむつの洗たくをすることもあれば、米とぎをすることもあります」²²⁾ というように、精神的充足に人生の価値を定めることで真の対等関係が構築されることを示唆している。

Ⅲ 江戸時代の子育て書に学ぶ父親の役割

1 脇坂義堂の『撫育草』について

『撫育草』の著者である脇坂義堂という人物は歴史的にはほとんど無名の人である。氏の紹介文によれば、出自は定かでないが、京都の二条高倉東に住んでいた町人で、167種の著作がある。諸国を講演旅行

して渡り、最後は心学の師を頼って江戸に身を定めた学究派と言うよりは実践家のようなだ。その原本数冊が資料集（杉浦丘園氏出版の心学の資料集『雲泉山誌』巻之三）に収録されていることが明らかになっている。今回の『撫育草』はその資料集に未掲載で、世に知られていないものであった。松田は、本書を全くの偶然から入手したという。「むかしの日本の育児法を知ろうと思って、古本屋さんで本の題名だけみて買ってきておいたのを、あとになってよみ、脇坂義堂という人物を知ったようなわけです」²³⁾ というから、文献史的にも氏の功績大であろう。江戸時代には豊富な育児書や教育書が生み出されたことは周知の事実である。『江戸の親子』を著した太田素子氏はその著書の「はじめに」の部分で、そのあたりの事情について次のように概観されている。

江戸時代の子育てと親子関係をひとことで特徴づけるとしたら、「父親が子どもを育てた時代」と括れるのではないかと思う。

もちろん江戸時代も育児の直接の担い手は、母親や子守女、祖母など女性がおおかった。けれども、記録を書き残したのは男性が多く、しかも、世に子育て書とよばれる儒者、小児科医、庶民教化師たちの子育て論の多くは、男性読者に向けて書いたものだったのである。

それは女性の識字率が男性よりずっと低かったためでもあるが、そればかりではなく、家の継承を価値と考える社会だから、子育てはいわば公ごとであり、女をよく教訓して良き子育てをさせることが家の最高

21) 前掲『おやじ対こども』pp74～75.

22) 同上, p80.

23) 同上, p30.

責任者たる男の責任とされていたためである。²⁴⁾

この太田氏の分類例を借りれば、脇坂義堂はおそらく庶民教教師に属するのであろう。京都の町家の父親から子育ての姿勢や態度を学びたいとの松田の願望がこの本との邂逅を為さしめたといえよう。

2 町家の教育論

その基本は家職の継承にある。最初に登場する挿絵は「家職大明神」とかいた掛け軸を一家でおがんでいるものだそうだ。自家の職業を神様として拝していることに、京都の町家の真髓が見受けられると松田は評している。家職の伝達を旨とするがゆえに、子どもの教育責任者は一家の主である父親となる。その基本に立ち、展開されている教育論の特徴を挙げてみると、その一は、教育の始まりに公的なルールの習得を課していることである。家職の継承という私的な領分を対象とした『撫育草』のトップに、「御公儀様の御法度」を置き、以下「町分の作法」「わが家の定」という順に理解させることとしている。その二は、教育の二段階説をとっていることである。幼少期の手習い（読書算術）は寺子屋に託し（12, 3歳位まで）、14, 5歳から家職に就かせて職業教育を行うとしている。その三は道徳教育の方法で、「幼稚の時よりすこしにてもよき事の縁にふれさせ申すべく候。あしき縁にふれさせず、あしきたわむれ、あしき友、あしき本などは、かりにも

かたく見せ申すまじく候」²⁵⁾と明言している。巷に氾濫していた非健全文化を子どもから排除することを強調しているのである。その四は体罰への批判である。「義堂氏は、体罰は子どもを道徳的に腐敗させるという確信を持っていました。体罰をおそれて、親に一切をかくすようにしむけるのは、子どもにウソつきになれと教えるようなものです」²⁶⁾と、恐怖心をもって服従させる方法を否定している。

3 町家の子育てにおける父親の役割

義堂は父親に対し、子どもへの教育責任と義務を説いた。それを松田は、次のように根拠づける。「もともと子どもの教育というのは、ひとりだちして社会生活ができるようにすることであります。自主独立の町人では、その全責任が父親にかかっています。家の職業をつぐことが独立生活者となることですから」²⁷⁾と。その際の注意点の一は、勤労自身に喜びを持たせることである。「生きるということは仕事をたのしみ、仕事を誇ることでありというのが町人の信条でありました。それですから、修業時代に仕事のよろこびをさまたげるようなものは一切、子どもから遠ざけておくのが父親の義務でありました」²⁸⁾というように、禁欲を奨励し、仕事に集中できるような環境を整えることに心を砕いている。その二は、学問の目的はあくまで家業に精励するためのものであるということ。しかしながら家業経営に必要な実学のみならず、町人であることを喜び、また誇りに思うこと

24) 太田素子著『江戸の親子』中央公論社、1994年。

25) 前掲『おやじ対こども』p44。

26) 同上、p48。

27) 同上、p31。

28) 同上、p32。

に寄与する教養レベルの学問も視界においている。その三は過剰育児の戒めである。美食や美服を廃して、粗食や粗服を与えるよう督励しているのである。これは、男性的視点ないし野性的視点ともいえるもので、父親が子育ての責任を実質的に負っていないければ発言しにくいこととしている。

まとめに代えて

松田は1960年代の子育て問題の一つに、父親の無力化を見て取った。育児行為への関与が進む一方で、父性の存在感が乏しさを深めていくことに心を痛めていた。その原因究明と解決への道を求める過程で誕生したのがこの書である。それには、江戸期、京の町家の父親のために著された脇坂義堂の『撫育草』との幸運な巡り合いが執筆の端緒の一つとなった。

戦後新体制のもと、子どもたちは科学や医学の恩恵を受け、平和で幸福な生活を約束されるはずであった。ところが1955年頃から育児の現実に新たな困難が出現するようになった。法や科学・医学の力を超えた地平での種々の問題が露呈し始めたのである。小児科医師であり思想家であり歴史学者でもあった松田は、その総力を上げてこの課題に取り組んだ。今回対象とした『おやじ対子ども』は、父親の役割を育児書の基本テーマに掲げたという点で新鮮な発想であり、その根拠を江戸の育児書に求めた先駆性は、その後の江戸ブームないし江戸時代の子育て書の研究へ道を拓いた感がある。

松田は汲むべき有効な教訓として、『撫育草』から次の5点を導いている。その一は、当時の京の町民が保持していた自立

的・主体的精神である。その二は、家の職業ないし勤労を尊び、誇りにしていたこと。その三は、父親が育児や教育の基本方針を持ち、また身近にいて絶えず見守り関与していたこと。その四は、子どもへの愛情やしつけには、父性的すなわち理性的かつ長期的な視点を欠くべからざるものと考えていたこと。その五は、しつけにあたっては体罰を廃し、家長としての権威で処していたことである。以上5点は、現代においていづれも考慮されるべきものであろう。なお本稿では、本書中触れてある福沢諭吉論など、氏の社会思想家としての知見に踏み込むことができなかった。今後の課題としたい。